

季刊『中医臨床』「弁証論治トレーニング」コーナーは1994年からスタートして、今年で75回を超えました。

私はコメンテーターのひとりとして、1995年の第6回目からこのコーナーを担当させていただきましたが、正直に言えばこれほど長く続くとはい想像さえしていませんでした。この間、日本語の微妙な表現の難しさに悪戦苦闘することもありましたし、日本と中国の事情の違いを深く考えなければならぬこともありました。しかしながら、日本全国の多くの読者の方々の中医学を学ぼうとする情熱に励まされ、また支えられて今日まで続けてこられました。全国の読者の皆さま、特に忙しい仕事の合間を縫って、一つ一つの出題症例に対して、真剣に分析しながら「弁証」と「治療」へのアプローチをしてくださった方々には、感謝の思いでいっぱいです。皆さまの貴重な投稿により、一つの病案に対してさまざまな観点からのアプローチができ、コーナー自体もよりダイナミックに展開することができました。心より感謝しています。また、長年の間、中医アドバイザーの場所をご提供くださり、コーナーへ症例提示のご協力をしてくださった日本漢方大家の桑木崇秀先生、菅谷クリニック院長の菅谷繁年先生、吉永医院院長の吉永和恵先生をはじめ、多くの諸先生方にもこの場をお借りして心より感謝を申し上げます。

医学書で得た知識を自らの臨床経験に変えていくには、絶えず訓練や実践を繰り返さなければなりません。その点からいえば、このコーナーは「畳の上の水練」かもしれませんが、一つの練習の場として深い意味があります。しかし、実際の臨床では、症状の真偽もあり、証の挟雑や変化などもあるので、弁証と治療は、一筋縄ではいきません。過去にまとめた症例を振り返ってみると、まだまだ私の経験不足のために弁証も治療も十分でなかったと反省するところがいくつもありました。ゆえに症例に書かれた弁証と治療は、絶対のものとはいえません。あくまでも、実際の現場ではどのように弁証論治を進めればよいか、どのように臨床力を高めればよいかと思悩む方々に、少しでも思考のヒントになってくれればと思っています。

今回、東洋学術出版社の井ノ上匠社長と編集の森由紀さんのお力により、「弁証論治トレーニング」で発表した症例のなかから臨床でよくみられる30症例を選び、若干の修正とわかりやすい図表を加えて、新たに本として上梓することになりました。皆さまの臨床の参考としてご活用くだされば幸いです。まだ不十分なところに対して、ご批判、ご鞭撻をいただければ幸いです。

2012年夏 高橋楊子